

くわしたじょうあと  
桑下城跡

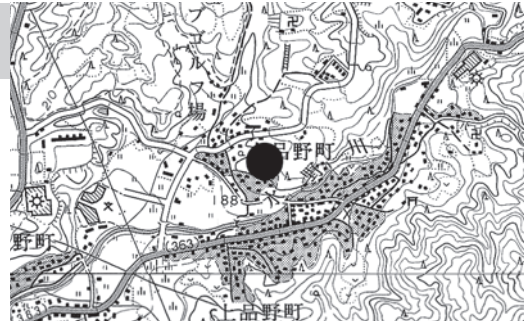
所在地 瀬戸市上品野町  
(北緯35度15分24秒 東経137度08分19秒)

調査理由 国道363号改良工事

調査期間 平成20年8月～21年3月

調査面積 3,300㎡

担当者 小澤一弘・宇佐見守・武部真木



調査地点 (1/2.5万「多治見・猿投」)

調査の経過 国道363号道路改良工事伴う事前調査として、愛知県建設部道路建設課から愛知県教育委員会を通じて委託を受け発掘調査を行った。調査面積は3,300㎡である。

立地と環境 桑下城跡は瀬戸市北東部にある品野盆地の北東、標高210m前後の丘陵上に立地する平山城であり、東西約220m、南北約100mの規模が推定されている。周辺には隣接して桑下東窯(戦国)や西金地遺跡(縄文～江戸)、遺跡西方の低地部には上品野蟹川遺跡(縄文～中世)などの調査地点が分布する。丘陵南側の集落のある谷筋を水野川が西流し、ここに信濃国へ続く中馬街道が通っていたとされる。一帯は尾張・三河の国境に近いことから、特に16世紀代には織田・松平(今川)の覇権争いの最前線となった。江戸時代の地誌類によれば、桑下城は松平内膳(信定)の家老である永井(長江)民部の居城とされている。なお、品野城跡は谷を挟んだ反対の標高330mの丘陵上に立地している。

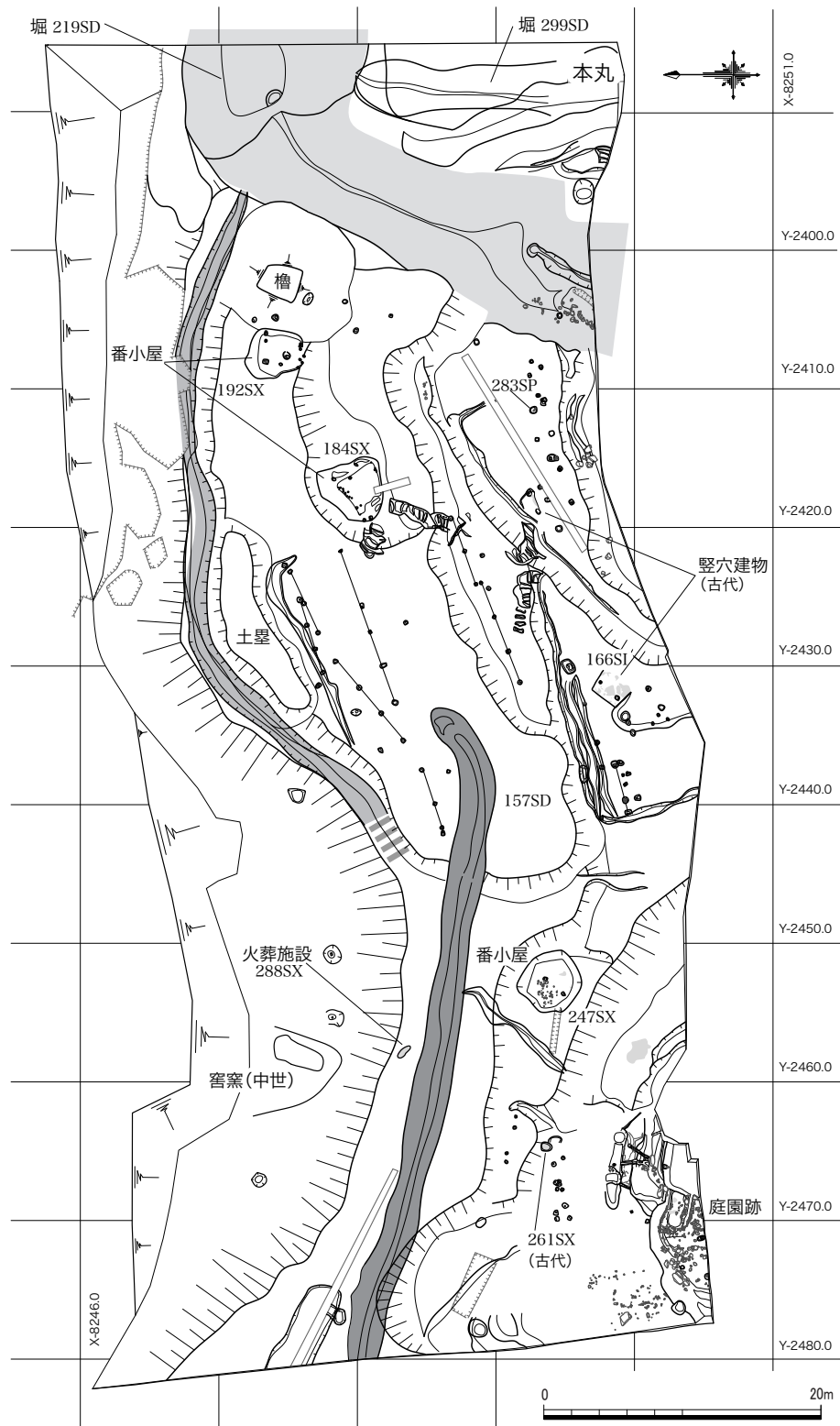
調査の概要 平成17、19年度に続き第3次調査となる今回の調査区は、平成19年度調査地点西側に隣接する範囲であり、このうち西半分をA区、東半分をB区として調査を行った。遺跡全体でみると、調査地点は中央付近でやや北寄りの位置に相当する。

主な遺構 城は東西にのびる丘陵地形を利用しており、北東部が最も高く南西部へ低くなっている。関連する遺構としては、南側斜面にかけて曲輪と想定される平場のほか、大規模な堀、溝、土塁、櫓跡、番小屋跡、柵列、庭園跡があり、本丸西部で堀、溝を確認した。桑下城成立以前の遺構では、陥し穴(3基)、窖窯(1基)、火葬施設(2基)などがみつかった。

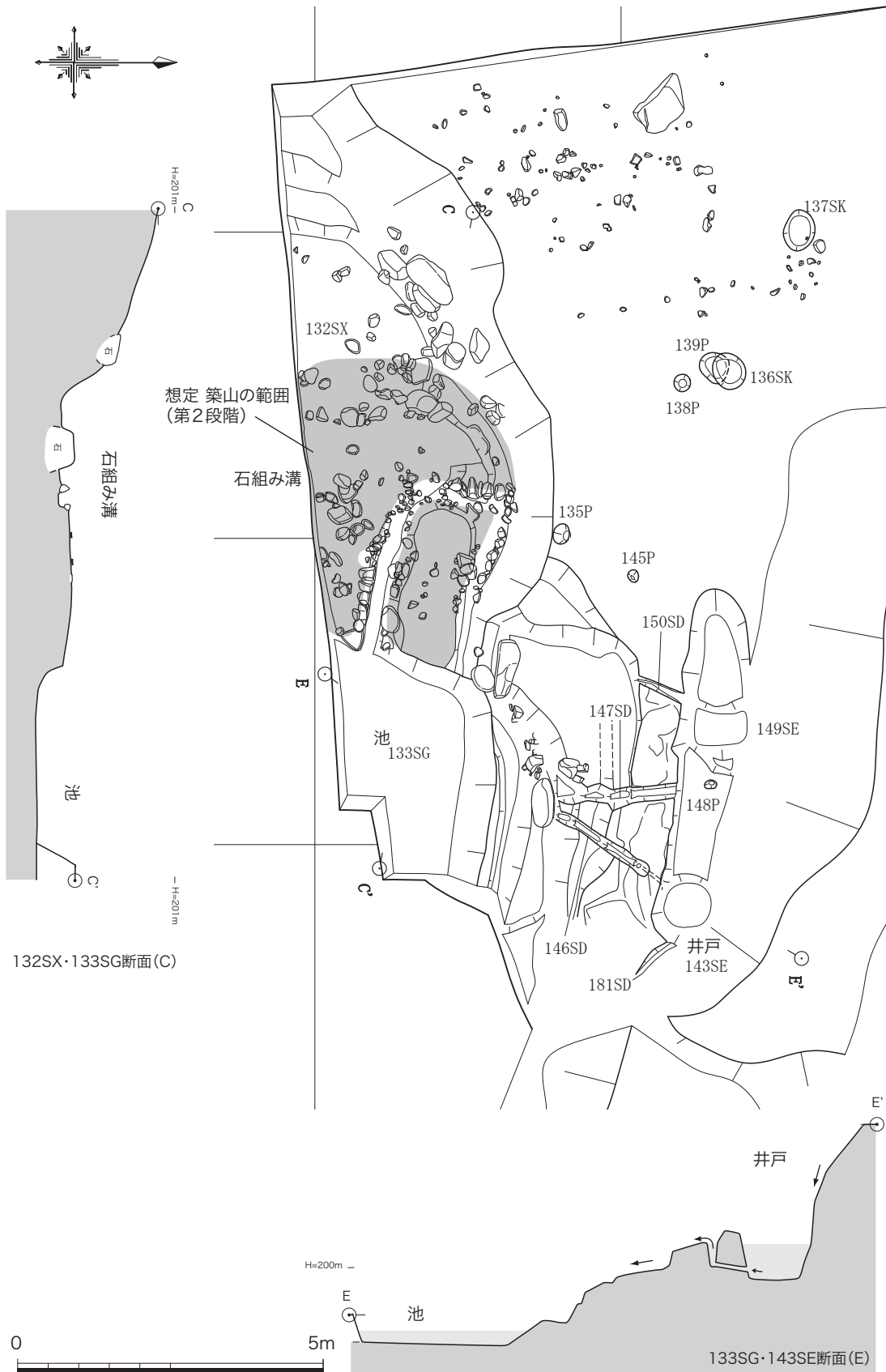
土 塁 土塁は北東部の曲輪の頂部北辺に沿って若干弧をえがくように配置されており、基底部の長さ15.5m、幅7～8m、残存している部分で平場からの高さは約70cmの規模を測る。

櫓 跡 と 番 小 屋 跡 櫓跡は最頂部の曲輪の北東端に位置し、周囲よりさらに一段高い。基底部は径7～8m、高さ約1.2mの土饅頭形を呈する。西側の斜面で数基の柱穴を確認した。番小屋跡は南向き斜面を掘り凹め堅穴状に床面を形成したもので、櫓跡の西側にかけて2基、離れた西方の曲輪で1基を確認した。184SXの床面は幅2.1～3.0m、奥行2.3mの台形状をなし、面積は6.4㎡、南西側を出入口としている。192SXの床面は幅1.6m～2.9m、奥行き3.2mの台形状をなし、面積は7.8㎡、南側が出入口と思われる。両者ともに床面あるいは周縁にピットが確認されており、簡易な覆屋をもつような構造が想定される。247SXは西側に出入口をもつ径約4.5mの不整円形を呈する。整地土に覆われており、床面直上で出土した遺物は古瀬戸後期段階を含むなど、やや古い様相がみられる。

堀 ・ 溝 断面V字状の薬研堀が本丸と西側の曲輪の間を完全に遮断している。堀(219SD)の規模は最も狭い櫓付近で幅約7m、堀底から櫓頂部までの比高差は7.6mを測る。城の内側へと続く部分では様相が異なり、底幅が拡張されて箱堀状となり、本丸側の突出部に沿って屈曲し調査区外南へと続く。堀底の最大幅は3.9mあり、比較的緩やかに南へ傾斜している。



主要遺構平面図(1:500)



庭園跡付近 平面・断面図(1:100)

北西部の曲輪頂部を東西に縦断する溝(157SD)があり、東端は土塁の南側で浅くなり途切れる。断面U字状を呈し、幅約2.6m、深さ約1.0mを測る。埋積の状況等から古い段階の遺構と思われる。土塁北側をめぐる溝は、幅1.2m、深さ60cmあり、位置・埋積状況等から土塁の構築工法に関連する遺構と想定される。なお、空測後に本丸西側整地層の下で断面逆三角形状を呈する南北方向の堀(新旧2条あり、299SD)を確認した。

庭園跡 丘陵を背にした曲輪の奥に設けられた庭園であり、井戸には特殊な構造が認められる。また、石組は作り替えが認められる一角があり、少なくとも2時期のあることが判明した。

井戸 井戸(143SE)は一段高い位置の曲輪に設けられている。周辺からの湧水を溜めるつくりで、構造物はなく素掘井戸と考えられる。規模は径1.1m、検出面からの深さ0.85mである。南西側面の下位に径10cm前後の横穴が穿たれており、水はトンネルから溝(146SD)を通り池の方向に流れる仕組みと考えられる。井戸は東西方向に長い長楕円形の凹みの東端にあり、同じ凹みから池方向へ導水する別の溝(147SD,150SD)が確認された。

石組 石組の溝は池の西側に接してコの字形に配置されており、池と同時期の施設と考えられる。範囲は東西3.0m、南北1.8m、溝の幅25cmを測る。20～40cm大の石材を用いており、組み方は不揃いで一定していない。被熱の痕跡のある石材が多く利用されている。

池 池(133SG)は調査区外へ続くため全体の形状は不明であるが、検出範囲で東西3.5m、南北2.5mを測り、北辺と西辺に直線的な部分がみられる。深さは約0.4mあり、地山を掘り下げた底面はほぼ平坦である。北縁に沿って溝が配されている。

その他 北西側の曲輪の北斜面で山茶碗(第8型式)を焼成した窖窯を検出した。そのほか同じ曲輪頂部および土塁の北西側で火葬施設と推定される土坑と焼土の範囲を確認した。288SXは長軸が北西―南東方向を向く長さ1.2m、短軸43cm、深さ約20cmの船底形の凹みで、内部の埋土には少量の炭化物と骨片を含む。土坑周囲は被熱による変色がみられ、特に側面の上位は部分的に硬く焼締まっている。ただし、炭化物は少量で土坑底面には被熱の痕跡は認められなかった。検出層位の検討から、時期は城の成立以前と考えられる。

出土遺物 中世遺物の分布は本丸の西斜面と堀付近に集中し、ほか番小屋(247SX)と庭園跡、柱穴(283SP)でみられる程度である。瀬戸・美濃産陶器擂鉢が最も多く、天目茶碗、灰釉・鉄釉皿類、花瓶や耳付鍋のほか匣鉢、挟み皿、焼台など窯道具、窯壁の一部があり、概ね瀬戸・美濃大窯編年の大窯1～2段階に属する。これらの大半は本丸部分改築以前に付近で操業した窯跡からの廃棄物と考えられる。ほかには常滑産甕、土師質の皿、鍋、青磁など輸入磁器の小片がある。城の成立以前の時期については、8世紀後半～9世紀初め頃の須恵質の瓦塔片(屋蓋部10点)、須恵器杯、蓋、山茶碗、小皿などがある。(武部真木)

まとめ 今回の調査では丘陵を切り込んで造成され、防衛を基本とする施設を配置した各曲輪部分で、城の形状が良好な状態で残っていた。場所は本丸の西側部分で、堀と各曲輪を調査した。本丸の西側には深い薬研堀と、曲輪が14カ所あり、曲輪からは番小屋跡、掘立柱建物、柵列、庭園跡等が見られた。本丸の西南端の精査により、本丸の造成に少なくとも3時期、地山直上の灰層と暗黄褐色層整地層、地山ブロックと黄褐色整地層、最終盛土整地層であることを確認した。また本丸西側から堀2条と径30～40cmの柱穴5基を検出した。

庭園跡は調査区南西部の曲輪で、井戸、溝、石組、池で構成されている。全体の規模は調査区外に展開するため不明であるが、石組みの組み替えが二度見られることから、少なくとも庭園は2時期があり、庭園が名立たる武将だけでなく在地領主クラスまでにも普及していたことが窺える。(小澤一弘)



桑下城跡全景（北西から）



番小屋跡(184SX,北西から)



番小屋跡(192SX,北から)



本丸と櫓の間の堀(219SD,北から)



番小屋跡(247SX,南東から)



作業風景(本丸側の東から)



曲輪頂部のピット列(東から)



庭園跡の井戸付近(北西から)



庭園跡の石組み溝(東から)



庭園跡の井戸より続く溝と池(南から)



竪穴建物166SI(北から)



283SP遺物出土状態(北西から)



出土瓦塔片(裏)